

令和 2 年 5 月 10 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02340

研究課題名(和文) アメリカ文学における平和への戦略——第二次世界大戦がもたらした文学的影響

研究課題名(英文) Literary Strategies for Peace in American Literature: The Literary Influence Caused by WWII

研究代表者

新田 玲子(Nitta, Reiko)

広島大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：40180674

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：第二次世界大戦に参加したアメリカの若者たちは戦争の愚かさをそれまで以上に強く意識していた。従って彼らの作品はそれまでと異なり、英雄的な性格がまったくなく、戦争の愚かさ・虚しさを強調する。さらに第二次世界大戦後の作家は、戦争を題材にすること自体が新たな戦争を引き起こす危険も、戦後生まれの平和な世代には戦争の暗い現実が敬遠されることも強く意識していた。そのため、彼らは戦争の実態を直接描き出す戦争作品から、平和な世界を舞台に、未来において戦争や争いを引き起こさないための行動の仕方を考えさせる、新たな平和文学へとシフトしてゆく。本研究はそうした文学的戦略の変化を細かく分析したものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、アメリカ文学における戦争を直接題材にしない作品が実は戦争と深く関わっているという、新たな読み方を提示したに留まらない。本研究は、戦後75年が過ぎ、戦争を知らない世代がほとんどになりつつある日本において、戦争経験を単に直接語るだけでは不十分であることを知らしめ、どうすれば戦争に関心が持てない若い世代に戦争について考えてもらえるか、特殊な経験である戦争に憧れを抱かせることなく戦争の実態を伝えられるか、そして今よりも平和で豊かな社会を未来にわたって築き上げてゆくにはどうすればよいかを考えるうえで、非常に役立つ指標となるものである。

研究成果の概要(英文)：The young Americans who joined WWII were terribly aware of its reality. They dealt with the war, therefore, very differently from their predecessors and emphasized the meaninglessness and the silliness of the war much more than before. They also recognized the danger to use the war material because its careless use may induce another war. Moreover, the young generation who were born after WWII and were brought up in the affluent and peaceful society would not face the ugly reality of the war for themselves. Thus the writers after WWII, especially those who were influenced by the Postmodernism, would not describe a war directly any longer. Instead they devised their own new literary strategy to establish a peaceful society in future. This study clarifies their challenging strategies for peace in American Literature after WWII.

研究分野：現代アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 現代アメリカ文学 戦争文学 平和文学 ポストモダニズム 第二次世界大戦 ホロコースト

### 1. 研究開始当初の背景

アメリカ合衆国は先住民との戦いによって白人支配地を広げ、本国と戦うことで植民地からの独立を果たし、南北戦争によって工業の発展や統一国家の基盤を築き、米西戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦を通して、国家権力を拡大させてきた。そして第二次世界大戦後も、朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、イラン・イラク戦争と、世界に対する覇権と影響力を維持し続けるための戦争に関わり続けてきた。こうした戦争はアメリカ社会に大きな影響をもたらすものであり、アメリカ文学における格好の題材となってきたが、「失われた世代」と呼ばれる第一次世界大戦を体験した作家たちは、戦争の虚しさをそれまで以上に強く意識するようになる。そして第二次世界大戦に参戦した若者たちは、戦場に出かける前からすでに戦争に対して幻滅していたと言われる。従って、第二次世界大戦を体験した作家たちには、戦うことの愚かさをリアリスティックに描き出すだけでは十分な価値を持つ文学作品になり得なかった。

さて、研究者は本研究に先立ち、「ポストモダニズムにおける社会的責任と道徳——新しいユダヤ系アメリカ作家の抵抗」という研究で、第二次世界大戦中のホロコーストの影響を強く受けたユダヤ系アメリカ作家を分析した。そして彼らの中で、特にポストモダンの影響を受けて1970年代以降に活躍した作家たちは、戦争やホロコーストといった体験の苛酷さを描くことよりも、人がなぜそのように憎しみあい、傷付けあったのか、その理由を探ることや、同様の出来事を未来に繰り返さないためには何が求められるのかに、より深い関心を示し、未来において再び戦争やホロコーストのような悲劇を繰り返さないための新しい平和文学を作り出していることを明らかにした。

ホロコーストの影響を強く受けたユダヤ系アメリカ作家に見られる、戦争に対するこうした新しい特徴や傾向は、戦争それ自体を描くだけでは足りなくなっていた第二次世界大戦後の他のアメリカ作家にも共通しているのではないか。彼らは、第二次世界大戦における自身の戦争体験に基づく作品とは別に、戦争とはまったく関係がないように見える作品も手がけているが、こうした作品にも実際には彼らの戦争体験に基づく様々な思いが埋め込まれており、彼らの戦争作品以上に如実に、平和を目指す上での彼らの新しい文学手法や文学的戦略を体現しているのではないか。本研究はこうした可能性の上に企画・発展させられたものである。

### 2. 研究の目的

本研究は、ホロコーストの影響を受けたユダヤ系アメリカ作家の中でも、特にポストモダンの影響を受けた作家に共通する特徴——過去の戦争体験をリアリスティックに描き出すことより、未来に二度と戦争を繰り返さない方法を模索する、未来に開かれた平和文学としての特徴——が、第二次世界大戦を体験したその他のアメリカ作家全般にも窺え、それがこの時代の特徴になっていて、一見、戦争と無関係の題材の中にも、平和な未来を模索しようとする作家たちの新たな試みが見て取られることを立証しようとするものである。そのためにまず、彼らの戦争体験に基づく作品において彼らが用いた新しい表現方法や文学的戦略がいかなるものかを分析する。そのうえで、同様の表現方法や文学的戦略が、これまで戦争と関係付けて論じられることのなかった彼らの他の作品にも援用されており、これらの作品を新しい平和文学として読むことが可能であることを示す。またそうすることによって初めて見えてくる、それぞれの作家の戦争に対する強い思いも明らかにする。

このようにして第二次世界大戦を体験した作家の戦争に対する姿勢を分析したうえで、彼らの姿勢と、第二次世界大戦以前の作家の戦争に対する姿勢とを比較し、新しい平和文学が構築された社会的・時代的特徴を明らかにし、その考察を基にして本研究成果が現代の日本においてどのような意味や意義を持ちうるか、提言したい。

### 3. 研究の方法

まず、J. D. Salinger、Joseph Heller、Kurt Vonnegut など、第二次世界大戦を経験し、なおかつ新しい文学表現を試みた作家による戦争を題材とした作品を取り上げ、若い戦後世代に戦争体験を伝えるために彼らが試みた新しい文学手法の詳細を明らかにする。続いて、彼らの戦争を直接題材にしない他の作品にも、彼らの反戦思想や未来に平和を引き継ごうとする姿勢が現れていないかどうかを精査しつつ、戦争を直接題材にしない作品が、実は新しい形の戦争(平和)作品として機能している点を探る。そのうえで、戦争を直接題材にしないことによって彼らが試みた、未来に平和を受け継ぐための文学的戦略がどのようなものであるのか、解明する。

第二次大戦を体験した作家による新しい文学手法や文学的戦略には、1960年代くらいからアメリカ文壇での影響が顕著になってゆく、Theodor Adorno、Emanuel Levinas、Jacques Derridaらのポストモダン思想家の影響も見逃せない。そこで彼らの文学手法や文学的戦略にポストモダニズムがどのように関わっているのか、同じ特徴が彼が描き出す未来や、平和を受け継ぐために彼らが不可欠と見なす姿勢にも現れていないか、検証する。

さらに、第二次世界大戦を体験した作家の文学活動には、第二次世界大戦だけでなく、朝鮮戦争やベトナム戦争など、第二次世界大戦以後にアメリカが関わった戦争の在り方が深く関係していると推察される。本研究の最後には、そうした様々な戦争の影響やアメリカ社会の動向にも目配りしながら、幅広い観点から彼らの文学活動について考察したい。そして最終年度には、彼らの文学活動の特徴を、第一次世界大戦の影響を受けた Ernest Hemingway や、南北戦争を題材にした *The Red Badge of Courage* が注目を集めた Stephen Crane らの戦争の扱い方と比較し

て、第二次世界大戦後の戦争の描かれ方、扱われ方の特徴を時代の流れの中で議論したい。

なお、これらの研究成果はそのつど国内外の学会で発表し、様々な専門家からレビューを受けて研究内容を検証し、より完成された論文に仕上げたうえで公表してゆく。

#### 4. 研究成果

研究は当初の予定通り進め、その成果は毎年 The International Conference of Psychology and Literature などの国際学会で発表し、そのつど分野を代表する研究者にレビューを受けて、一層充実した内容の論文に仕上げたうえで公表してきた。

公表論文においては、たとえば、Joseph Heller が *Catch-22* において大仰な笑いを使って若い世代に反戦メッセージを伝えようと試みた文学手法を分析し、類似の手法によって、豊かなアメリカ社会を舞台にした *Good as Gold* や、聖書を題材にした *God Knows* から反戦メッセージが読み取れることを論じた。同様に、Kurt Vonnegut が *Slaughterhouse-Five* で反戦メッセージを伝えるために用いた SF 的要素の役割を解析し、*God Bless You, Mr. Rosewater* や *Cat's Cradle* など、直接戦争と関係していないように見える他の作品でも同様の手法が援用され、反戦メッセージを伝えていることを示した。さらに、自ら戦争作家を任じた J. D. Salinger の、戦争に対する独特の関わり方に着目し、この観点から、戦後の豊かなアメリカ社会を描いたとされる彼の代表作、*The Catcher in the Rye* を戦争作品として読み直し、新たな作品解釈と評価を提示した。

ところでこれら、新しい形で戦争を扱うアメリカ作家は、ポストモダニズムを含む、第二次世界大戦後の新しい世界観や思想に少なからぬ影響を受けている。各々の作品分析では、権威的、包括的な概念や姿勢に疑念を抱き、差違や多様性を重んじ、逸脱のような、それまで評価されてこなかったものへ目を向ける、彼らの新しい価値観を明らかにしただけでなく、彼らの文学技法や文学的戦略が同様の新しい価値観を基に編み出されていることを指摘した。

研究の最終段階では、第二次世界大戦を体験したアメリカ作家の活動をより広い視野で捉え直し、本研究に先だって行ったホロコーストの影響を受けたユダヤ系作家研究の成果や、20 世紀前半を代表し、第一次世界大戦を舞台に、*The Sun Also Rises* や *A Farewell to Arms* などによって作家的地位を確立した Ernest Hemingway と、19 世紀後半に活躍し、南北戦争を題材にした *The Red Badge of Courage* で戦争作家と目された Stephen Crane を考察に加えた。そしていづれの作家も一様に戦争の愚かさや反戦姿勢を示してはいるが、Crane の時代から Hemingway の時代、そして第二次世界大戦後へと、戦争に対する絶望観が一層増してゆき、第二次世界大戦以後の作家は戦争を題材にすることにさえ危機感を抱くようになる、という過程を描き出した。こうした推移と照らし合わせれば、第二次世界大戦を体験した作家たちが、戦争の実情を知らしめようとするより、争いを避け、平和な未来を受け継いでゆく方法を伝えることに、より強い関心を抱くようになることも、彼らの作品に登場する中心人物は、Hemingway が描いたような、戦争の犠牲者ではあっても男らしく、憧れの対象となりえヒーローではなく、愚かな失敗者(シユレミール)やアンチヒーローとなってゆくことも、当然の結果と見なせるであろう。

第二次世界大戦を体験した作家がこれほどまでに戦争に対して幻滅し、過敏にならざるをえなかった理由のひとつは、核兵器が登場し、新たな戦争が人類滅亡を現実のものにしたからである。加えて、アメリカ合衆国は第二次世界大戦後も朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、イラン・イラク戦争と戦争を繰り返してはきたものの、本土が戦地になることはなく、ほとんどの人々は平和で豊かな日常生活に慣れ親しんできた。その結果、戦争は重苦しい、忌避される主題である一方で、扱い方を間違えれば、若い読者に非日常的な魅力をもたらしかねない危険な題材になったのである。従って、本研究が明らかにした、戦争を直接描き出すのではなく、未来に平和を受け継いでゆく方法に焦点を当てた新しい文学的戦略は、文学的新傾向として興味深いだけではない。第二次世界大戦後の長い平和を享受してきた現在の日本において、戦争体験を次の世代にいかに関わらせるか、今ある平和をいかにして未来に繋いでゆくかという、今後の平和活動の在り方を論じる上で大きな指標になる。

本研究のこのような最終論考は、2020 年 1 月に開催された 19th Hawaii International Conference on Arts and Humanities で発表し、高く評価された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Reiko Nitta	4. 巻 vol. 39, no. 2
2. 論文標題 Catcher in the Rye as a War Novel	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Literature and Belief	6. 最初と最後の頁 51-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 新田玲子	4. 巻 77
2. 論文標題 " Kurt Vonnegut ' s Postmodern Peace Strategy in Cat ' s Cradle "	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The Hiroshima University Studies Graduate School of Letters	6. 最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 新田玲子	4. 巻 81
2. 論文標題 「アニメ『この世界の片隅に』の功罪 新しいアメリカ平和文学研究者の立場から」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 New Wave	6. 最初と最後の頁 14-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 新田玲子	4. 巻 61
2. 論文標題 Salinger and War	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 英語英文学研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新田 玲子	4. 巻 51
2. 論文標題 King David ' s Psychological Trap of War in Joseph Heller ' s God Knows	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『中・四国アメリカ文学研究』	6. 最初と最後の頁 13-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 新田 玲子	4. 巻 75
2. 論文標題 Vonnegut ' s Psychological Fantasy Strategy in God Bless You, Mr. Rosewater and His Creative Intention in Comparison with Slaughterhouse-Five	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 広島大学大学院文学研究科論集	6. 最初と最後の頁 31-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新田 玲子	4. 巻 54
2. 論文標題 平和を繋いでゆくためにー広島生まれのユダヤ系アメリカ文学者の提言	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 New Wave	6. 最初と最後の頁 14-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Reiko NITTA
2. 発表標題 Salinger ' s Literary Strategy with War Trauma in The Catcher in the Rye
3. 学会等名 36th International Conference on Psychology and the Arts (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Reiko NITTA
2. 発表標題 The Literary Strategies for Peace after WWII
3. 学会等名 Hawaii International Conference on Arts & Humanities (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 新田玲子
2. 発表標題 The Merits and Demerits of In This Corner of the World
3. 学会等名 The 35th International Conference of Psychology and Arts (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 新田玲子
2. 発表標題 Kurt Vonnegut 's Postmodern Peace Strategy in Cat ' s Cradle
3. 学会等名 The 34th International Conference of Psychology and Arts (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 新田玲子
2. 発表標題 Salinger and War
3. 学会等名 33rd PsyArt International Conference on Psychology and the Arts (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Reiko Nitta
2. 発表標題 King David's Psychological Trap of War in Joseph Heller's God Knows
3. 学会等名 21st Annual American Literature Association's Jewish American & Holocaust Literature Symposium (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Reiko Nitta
2. 発表標題 Vonnegut's Psychological Fantasy Strategy in God Bless You, Mr. Rosewater and His Creative Intention in Comparison with Slaughterhouse-Five
3. 学会等名 32nd International Conference on Psychology and the Arts (国際学会)
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Hiroshima University Institutional Repository <a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja</a>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考